

ヒューマン・ケア科学専攻の挑戦 —学融合的学問体系を目指して—

大久保一郎

人間総合科学研究科教授 ヒューマン・ケア科学専攻長

1. 「たこ壺型」から「ささら型」の学問へ

ヒューマン・ケア科学専攻は筑波大学の大学院改革によって2001年に誕生した、従来の学問体系を打ち破る画期的な発想に基づく専攻である。

今日、世界のグローバル化やITの急速な発展、少子高齢化のもとで、これまで予想されなかったさまざまな社会のひずみが引き起こされ、また、社会構造や家族構造の変化は、人間関係の希薄化、世代間ギャップ、家族葛藤などを通して多様な心理社会的ストレスを生じ、心身の健康障害、不適應、さらには自殺や非行・犯罪の増加となつて、社会的な課題として現れてきている。このような状況の中で特別な支援を必要とする人びとのあり方も多様化し、それに適合した新しいアプローチが緊急に求められている。

従来では上記のような社会的課題に対して、関連する分野が連携を図ることで対

応してきたが、この連携はそれぞれの学問分野が垣根を有して、お互いの領域を侵すことなく、それぞれの立場で協力してきたものである。しかし、課題の複雑さ、研究者層の薄さ、研究手法の未熟さ、財政的な課題等からこのような連携体制では十分な成果を上げることが困難であった。このような反省に立って、筑波大学大学院の改革の中で、大胆な組織の再編成が行われ、ヒューマン・ケア科学専攻が誕生した。

我が専攻では、従来の学問分野の連携から、それぞれの専門的学問領域を尊重しつつ、その垣根を壊して、関連分野の融合を目指している。関連分野とは教育学、心理学、心身障害学、体育科学、看護科学、社会医学等であり、まさしく「ひと」のソフト面の課題を中心として関連する分野が集合した。1つの専攻内で自然科学系、人文科学系を問わず、これほどまで広範囲な関連分野が統合された専攻は、日本国内でも極め

て稀であり、ユニークなものである。

この新たな学問体系の構築は、政治学者であった丸山真男が指摘した、いわば「たこ壺型」の学問から「ささら型」の学問への移行であり、我が専攻に与えられた挑戦でもある。

2. 現状と当面の課題

上記の理念の下、現在以下9分野からなり、それぞれの分野は本家ともいべき「たこ壺型」から「ささら型」を目指した教育研究者から構成されている。

①共生教育学(教育学系) ②発達臨床心理学(心理学系) ③臨床心理学(心理学系) ④障害福祉支援学(心身障害学系、看護科学系) ⑤ヘルスカウンセリング学(体育科学系) ⑥社会精神保健学(社会医学系) ⑦看護管理学(看護科学系) ⑧福祉医療学(社会医学系) ⑨保健医療政策学(社会医学系、看護科学系、体育科学系)

また博士号の名称も①ヒューマン・ケア科学 ②教育学 ③心理学 ④心身障害学 ⑤体育科学 ⑥医学 ⑦学術と広範囲にわたっている。

上記の理念が単に絵に描いた餅にならないようにするためには、多くの努力が必要である。各教員の学問的背景が異なるため、当面一つの専攻内で異なる学問上の価値観や考え方が混在することとなる。それぞれ

を尊重しながら最低限の統一を図る必要がある。教員会議の運営上の課題や学生の研究指導上の課題を多く抱えている。

3. 具体的な取り組み

学問の融合を図るため、いくつかの試みを実施している。

(1) カリキュラム上の工夫

ヒューマン・ケア科学基礎論とヒューマン・ケア科学研究法のそれぞれ3単位を、1、2年生の必須科目とした。それぞれの科目はオムニバス方式としてすべての分野の教員が講義を担当し、学生はヒューマン・ケア科学とはどのような学問であるかを肌で感じる事となる。これは単に学生のみならず、教員側にも有益であり、自身の研究分野がヒューマン・ケア科学という学問体系上の位置づけやその中での役割を認識、確認することに役立っている。なお、3年次編入学生は基礎論のみを必須としているが、研究法も履修することを勧めている。

(2) 複数研究指導体制の確立

学生の研究指導体制として、指導教員の所属する学系以外の教員を複数、副指導教員として持つことができることとした。これは学生自身の所属する研究分野以外の教員からも研究方法、分析方法等の指導助言を受けられることとなり、まさに本専攻の得意とするところである。学生は、異なる

学問分野と触れることにより、研究上の視野を広げることとなる。これもまた単に学生にとって有益というものではなく、教員間の研究上の交流が図られることとなる。異なる学問分野からの指摘は研究上の閉塞感を打ち破るよいきっかけとなる場合がある。

さらに、修士論文や博士論文の審査委員会も、複数の分野の教員から構成されることとしている。

(3) 公開講座の開催

ヒューマン・ケア科学という新しい学問を体外的にPRすることも極めて重要である。そのため、本年4月に公開講座を大学の総合研究棟Dにて開催した(文末に添付)。今回は第一回目ということもあり、ヒューマン・ケア科学に共通する内容として、医療ジャーナリストの和田努氏より「癒す人、癒される人 ケアのインターディペンデンス」というタイトルの特別講演の後、6分野の教員からなるシンポジウムを実施した。対外的な宣伝もさることながら、専攻内の教員の研究交流の促進に貢献した。

4. 今後の課題

(1) 社会人学生への配慮

ヒューマン・ケア科学の特徴から、その研究課題は現場で抱える諸問題に対して、その原因の分析や現状の評価、そして解決

のための方策等につながる実践的な研究課題が多い。そのため、社会人の院生の確保とその受け入れの体制の強化が必要である。その観点から、社会人が職場との両立が可能なような必須科目の設定やその時間帯等の工夫や、また社会人の実践経験をより適正に評価できるような入試制度の導入等を検討しているところである。

(2) 5年後以降の再編成

平成17年度は専攻が設置されてから5年目であり、早期修了者を除けば初めての課程博士が誕生する。18年度からいわゆる設置審のしほりから解かれ、新たな展開を迎える。ヒューマン・ケア科学は多くの学系等から構成されているので、出身学系や専攻の再編成等により現状では少なからず影響を受ける。例えば、平成19年度に予定されている看護科学専攻の誕生や心身障害学専攻の改組等は我が専攻のあり方にも影響が生じる。今後これらの動向に留意しながら、この機会を専攻がより発展するための好機として前向きに捉えていきたい。

5. さいごに

ヒューマン・ケア科学は新しい学問分野である。多くの学系の教員より構成されている。まだまだ足並みは揃わないかもしれない。専攻としては今年5年目を向かえ初めて課程卒業生を出すことになる。まだま

だ未熟であり、多くの課題を抱えている。
関係する専攻や学系のご理解とご支援を
いただければ幸いです。

(おおくぼ いちろう／保健医療政策学)

ヒューマン・ケア科学公開講座

期 日：2005年4月20日(水)13時～
会 場：総合研究棟D 1階講堂
対 象：学群、大学院学生、教員、技術職員、周
辺の大学及び教育・福祉・医療関連
施設

プログラム

13時00分 <開会の挨拶>

専攻長 大久保一郎

13時05分 <特別講演>

「癒す人 癒される人—ケアのインター
ディペンデンスを考える—」

演者 和田 努(医療ジャーナリスト、
元NHKディレクター)

司会 大久保一郎(保健医療政策学)

14時05分 コーヒーブレイク

14時20分 <シンポジウム>

「現代社会におけるヒューマン・ケア科学とは」

司会 庄司一子(共生教育学)

中谷陽二(社会精神保健学)

①「子育て支援ネットワーク構築の試みと
ヒューマン・ケア科学」

・飯田浩之(共生教育学)

②「障害者の快適な移動のためのバリアフ
リー環境の実現」

・徳田克己(障害福祉支援学)

③「がん患者への精神免疫的支援」

・宗像恒次(ヘルスカウンセリング学)

④「人間の尊厳とヒューマン・ケア意識障害
患者の看護実践から—」

・紙屋克子(看護管理学)

⑤「児童虐待の早期発見—アセスメントから」

・小川俊樹(臨床心理学)

⑥「児童虐待への治療的介入」

・森田展彰(社会精神保健学)

16時35分 全体討論